

映像による記録とその功罪

星 泉

ほし いずみ / AA研

学際的なチームで現地調査を進めるうちに、餅は餅屋に任せようと気づいた私たち。撮影を現地のプロフェッショナルに依頼して、満足のゆく映像作品ができたけれども、忘れてはいけないことがあった。

調査は団体戦

2014年8月、複数の分野の研究者からなる私たち研究チームは、チベットの牧畜文化を余すことなく記録した辞典を作ろうという夢を抱き、初めての現地調査に臨んだ。研究チームで一番の若手で、チベット人留学生のナムタルジャ氏の実家や親戚、友人の皆さんにお世話になるのだ。分野が違っただけでなく、言語能力も現地経験もみなバラバラ。何度も打ち合わせをし、事前合宿もこなし、準備は積み重ねてきたが、うまくいくのか不安でいっぱいだった。

私は団体で調査すること自体初めての経験でひどく緊張していたが、その場で判断しながらうまくやるしかないと思えた。まず誰が調査の相手をしてくれるか分

からないので、いつでも臨戦態勢でいる必要がある。ヤクに詳しい男性が訪ねてきた！糸撚りの得意な女性が来た！午後には植物に詳しい行者さんに会える！といった具合である。調査を始めるとなれば担当者が項目リストを手にメインで調査、脇では調査票に書き込む人がスタンバイ。誰かがカメラやICレコーダー、ビデオカメラを手際よくセットする。夜はその日の調査を振り返り、調査票に追加情報を書き込んだり、チベット語の綴りを確認したり、自分のメモをノートに清書したりと、大忙しだ。そんな毎日を通すうちに、現地でも受け入れてくれた家族とも馴染み、調査チームの役割分担もうまく回るようになっていった。

記録をいかに伝えるか

こうして豊かな牧畜文化の語彙を記録し、私たちの知識はみるみるうちに増えたのだが、難しいのはその先、牧畜文化を知らない人にその記録をいかに伝えるか、という点だ。私たちがもともと構想していた辞典は写真や動画などを使って、文字では伝えきれないものを表現するマルチメディア辞典である。映像媒体はうまく使えば非常にパワフルだが、素人の私たちにとってはうまく撮影するのはとても難しい。

ちょうどよいタイミングで、チベットでドキュメンタリー映像作家として活躍しているカシャムジャ監督をAA研に招き、彼の制作した映画『英雄の谷』を上映することになっていた。来日の折に相談したところ、なんと彼自身が撮影担当として調査チームに同行してくれることになった。

映像化したいのは何だ？

かくして2年目の現地調査では、牧畜民の暮らしを撮影することとなった。撮影はプロに頼むわけだが、私たちは撮ってほしいシーンやイメージを固めなくてはならない。何もかもを撮影することは無理なので、牧畜民の1日の暮らしの中で重要な場面のうち、映



バター作りの様子。バターの中からタンパク質を取り出すためによく水洗いする（撮影：星 泉）。

像でどうしても伝えたいところを選んで撮影してもらおうということになった。中でも外せないのが朝晩の搾乳や、バターやチーズ、ヨーグルト作りといった乳加工の様子、燃料糞作りなどだ。こうした伝統技術についてはぜひとも手元をしっかりと撮影してほしい。なぜならそうした映像は、現地の人々が将来的に牧畜文化を発展的に継承していく際の基礎的な資料になりうるからだ。

カシャムジャ監督と現地でも合流してから、私たちは何度も話し合っただけで撮影内容を固めていった。チームの中に映像制作のプロフェッショナルが加わったことで、私たちの目的意識はより一層はっきりとしたものになっていった。

電力が足りない

実は調査地は水道もガスも、電気も通っていない山の上だ。水は女性たちがポリタンクを背負って汲みに行く。ガスはないので女性たちがヤクの糞を拾って草地に広げ、乾燥させて作った燃料糞で火をおこす。電気は太陽光発電したものを蓄電して使っている。撮影隊と化した私たちにとって一番の問題は電力だ。私たちの当初の計画は、昼間撮影したものに、夜間必要な変換や加工を施して、効率よく作業を進めていこうというものだった。そのために夜間の作業用にデスクトップ・コンピューターも持ち込んでいた。お世話になっているお宅の電力を使い尽くしてはいけないと思って、ソーラーパネルも持ち込んだ。

1日目の朝の撮影が済んでしばらくすると、作業小屋として設営したテントにみんなが集められた。短い映像を加工したので観てみようというのだ。女性がヤクの糞を草地に広げている映像が画面に映し出された。さすがプロ、細かな手の動きまで実

朝、搾乳を待つ雌ヤクたちと糞拾いをする女性たち。そしてそれを撮影するカシャムジャ監督（撮影：小川龍之介）。



映像クリップ集より、ヤクの糞を燃料にするために加工中の女性たち。カシャムジャ監督には手元を入念に撮影してほしいと依頼した（撮影：カシャムジャ）。



映像クリップ集より、チーズ作りの様子。いわゆるカッテージチーズである。袋のまま外に吊るして水切りをし、シートに広げて乾燥させる（撮影：カシャムジャ）。



山の神に祈りを捧げるための焼き上げの様子を撮影中。香りのよいビャクシン、煎り麦、ミルク茶、麦こがし、お酒の他に、この日はその日作ったバターのお初をお供えている。朝晩の焼き上げはご主人の大事な仕事だ（撮影：海老原志穂）。

よくとらえている！ と思った瞬間に電源が落ちた。みんなの口からため息が漏れたことは言うまでもない。

映像加工には相当な電力を使うらしい。厳しい現実を突きつけられた私たちは計画を変更し、貴重な電力は撮影機材の充電のみに使うことにした。当初の計画はカシャムジャ監督を朝から晩まで酷使するものだったので、これでよかったのである。

忘れられない夜

監督が調査チームに加わってよかったことはたくさんある。言葉の壁がないことは大いに有利に働いたし、監督自身が牧畜文化に敬意を持って撮影に臨んでいたことは、調査地の家族にもよく伝わっており、撮影はスムーズに進んでいった。監督が撮影した映像をビデオカメラで再生してみると、現地の人たちは楽しそうに眺めていた。うまくいっていると思っていた。あの晩までは。

撮影と調査が進んで、何日か経ったある晩、夕食後の団らんのひととき、その家のご主人が口を開いた。今撮っている映像はどうするつもりだ、と。辞典に収録するつもりであることは伝えてあったが、何か気になることがあったのだろうか。厳しい顔つきにその場が凍りついた。

話を聴くうちにご主人の不安が分かってきた。今、チベットの若者たちの間では映画熱が高まっており、撮影したものをインターネットに簡単にアップロードしてトラブルが沢山起こっているのだという。嫁入り前の娘もいるというのに、もし自分の家族の映った映像がネットに流出などしたら困るというのだ。私たちはそのようなことはしないと約束し、出来上がった映像も観てもらって許可を得たもののみを、ご主人の納得するやり方

で使用するつもりだと必死で伝えた。

この経験は私たちの心に深く刻まれることとなった。倫理的な問題はなおざりにしてはならない。調査する側とされる側で、十分に話し合うことが必要だ。その夏は苦々しい思いとともに調査地を離れることとなった。

「映画にすればいいのに」

半年後の冬、私たちは編集して1時間半ほどの長さとなった映像を持って調査地を再訪した。ご主人や家族のいる場で上映会をすることになった。私たちにとっては重要な研究成果ともいえる映像だ。認められなかったらどうしようと心配でたまらなかった。

上映がはじまるや、その場の人々はみんな釘付けだ。実は映画狂だというご主人は身を乗り出して観ている。終始にこやかで、ときどき楽しそうに声を上げて笑ったりして、「いい作品になったなあ。映画にすればいいのに」などと言うのだった。ほっと胸をなでおろした私たちは、最後に映像の使用について切り出した。ご主人はきつぱりところ言った。「日本でも海外でも、牧畜文化に関心のある人たちに见せるなら何の問題もない。ただ、ネット流出だけは避けるよう気をつけてくれ」

よかった。オンラインのデータベースに映像を載せることはできなくなったけれども、学会やシンポジウム、企画展など、さまざまな場所で私たちが上映することに問題はなくなった。ご主人に深く感謝した私たちだった。

そして今後

映像つきのマルチメディア辞典を作るつもりだった私たちの計画は変更を迫られる

ことになったが、よい映像資料さえあればイラストに起こすこともできる。辞典としてはそれで十分なかもしれない。辞典編集はまだ道半ばだ。現地の人々と手を携へ、「団体戦」の良さも活かしつつ、よいものを作っていきたい。



真剣な表情で映像を確認するご主人（右）（撮影：小川龍之介）。



楽しげに映像を確認するご主人の長女（左端）と姪の娘。長女は搾乳から乳加工、水汲み、放牧、糞加工、料理と何でもこなす（撮影：海老原志穂）。



完成した映像に見入るご主人の父親。村の人々に尊敬される密教行者だ。映像は雨の降る中、雨雲を移動させる祈禱をしている様子（撮影：星 泉）。